

Robert Brecher: *Anselm's Argument.*  
*The Logic of Divine Existence.*

Gower, 1985, pp. viii+138.

矢内義顕

哲学史上、数々の問題を提起した、アンセルムスのいわゆる「神の存在論的証明」をめぐる論争がすでに終止してしまっただけのものではないことは多くの研究者が認めることであろう。それゆえに、この問題を扱おうとする研究書は後を断たない。本書もそうした中の一冊である。

著者 Robert Brecher は、現在 Brighton Polytechnic の哲学の Senior Lecturer である。これまでもアンセルムスの「存在論的証明」に関する論文をいくつか発表している。主なものとして、1. "Greatness" in Anselm's Ontological Argument, *Philosophical Quarterly* 24 (1974), pp. 97—105, 2. Pure Objects and the Ontological Argument, *Sophia*, 14 (1975) pp. 10—18, 3. Aquinas on Anselm, *Philosophical Studies* (Eire), XXIII (1975), pp. 63—66, 4. Hartshorne's Modal Argument for the Existence of God, *Ratio*, 17 (1976), pp. 140—146 がある。このうち、1, 3の論文は本書の第1章、第3章にそれぞれ収録されている。なお、本書は、1977年、カンタベリーのケント大学に Doctoral Thesis として提出されたものが元になっていることが序文に記されている。

構成は、1. Anselm's Concept of Greatness, 2. Necessity and Anselm's Argument, 3. *Proslogion* II, 4. 'Existence' and God, 5. God and Necessary Existence 6. Conclusion となっている。

本書はアンセルムスの「存在論的証明」を神学的視点から捉えようとするのではなく、プラトンの形而上学の枠組の中で理解し、その限りで妥当性を認めようとするものである。

さて、著者のこの中心的意図は、本書の第1, 2, 4章で特に展開されている。したがって以下この三つの章を中心に本書を紹介しよう。なお、以下で『プロスロギオン』はP、『モノロギオン』はM、『本論の著者はこれに対し何を答えるか』はPRと略し、必要な場合には Schmitt 版(略号S)の頁, 行を記すことにする。

著者はまず、アンセルムスの「それよりもより大いなるものは何も考えられ得ない何か」という神の「定義」に含まれる「より大いなる」(maius) という語に注目する。この語は、他の研究者が指摘するように「より善い」(melius) という語と相互に置換的ではなく、まして「より完全」(more perfect) という語と置換されるものでもない。それどころか、アンセルムスは 'maius' と 'melius' を注意深く使い分けている。実際、P c. II—IV で 'maius' は15回用いられるのに対し、'melius' は c. III で1回用いられるにすぎない。後者が積極的に登場するのは c. V 以下であり、そこでは神の「善」(bonum) が扱われている。つまり、'maius' は神の存在論的至高性を示し、'melius' は善性を示すのであって、この区別はP全体を通してなされているとされる。しかしP c. III で1回用いられる 'melius' (S. 103, 5) についてはどう理解すべきであろうか。著者は、これを1行下の 'judicaret' に引っぱられたアンセルムスの不注意によるものだときめつける。同様のケースは PR c. VIII (S. 137, 22) にも見られるとされる。

では 'maius' とは厳密にはいかなる意味であろうか。著者は、A. Stolz の 'Vere esse' im Proslogion (*Revue Bénédictine*, 47, pp. 331—47) を紹介し、M c. VII, XXVIII, XXXI などを具体的に列挙して、アンセルムスのプラトン主義的性格を示したのち、この語も「存在論的により大である」(ontologically greater), 「より実在的」(more real) と、プラトンの形而上学の枠内で理解されるべきであるとする。つまり、プラトンにとってイデア、質料的世界、非存在と実在度の異なる段階的世界が形成されるが、アンセルムスの念頭にあるのもこの図式なのである。

つぎに 'maius' と 'melius' とはいかなる関係にあるのか。神の善性は、論理的に先行する神の存在論的至高性から導き出されているのであって、これが P c. II—IV のちに c. V—XXV で神の諸性質が検討されるゆえんである。以上 'maius' の考察はP全体の構成について論じることにもなった。ではPの c. II, III についてはどうなるのか。

周知の通り、P c. III に焦点を合わせて、神の非存在の論理的不可能性ないし存在の

論理的必然性という様相論的解釈を提示したのは Hartshorne であり Malcolm であった。しかし著者はこの解釈を拒絶する。そして、そのために、『クール・デウス・ホモ』等の他の作品における「必然性」という語の意味を検討し、アンセルムスにおいて「必然性」は論理的ではなく、事実的であるとする。そもそも、現代の様相論はアンセルムスにとっては無縁なものであって、*P c. III* は Hartshorne の言うように神の存在の論理的必然性を提示しているのではない。では *c. III* は何を意味するのか。*PR c. IV* では、神の非存在が考えられ得ないことが神と他の被造物を区別する特徴であると語られている。このことから著者は、これを神の属性の一つとみなし、*P c. III* はこの意味で *c. V* 以下の神の性質を論ずる出発点をなしていると結論する。

では *c. II, III* の関係はどのように考えられるのか。著者は *PR c. III* を論拠として、神の非存在が考えられ得ないものであるためには、神の非存在の不可能なことが論理的に先行するとみなす。つまり、*P c. II* は神が存在すること、神の非存在が不可能であることを結論づけ、さらにここから *c. III* の結論が導き出されていると著者は考える。そして、*P c. II* の結論によって、アンセルムス自身が意図しているのは、それが必然的命題であるということではなく、神が永遠 (eternal) かつ自己充足的 (self-sufficient) であるということだと主張する。これこそ存在論的独立性、至高性を示すものだからである (cf. *P c. XIII, XIX, M c. VI, XVIII*)。

第1、2章で以上のことを述べたのち、著者は *P c. II* の解釈に取りかかる。

まず著者は「それよりより大なるものが何も考えられ得ない何か」が「記述」(description) ではなく「定義」(definition) であるとする。「定義」であるがゆえに、それは「愚かなる者」を納得させる手段となり得るのである。この点で著者は、Barth, Stolz, La Croix と異なった立場をとっている。アンセルムスは、「愚かなる者」を二次的な場所に置いているのではない。そうではなく、かれの証明は、信ずる者にも信じない者にも向けられたものである。そして、そこで求められるのは、信じない者を回心させることではなく (existential assent)、共通の基礎——これを著者はプラトンの形而上学とみなす——に基づいた認識的同意 (notional assent) を得ることである。したがって問題は「定義」の理解にかかってくる。

「それよりより大なるものが何も考えられ得ない何か」が「精神の内に」も「実在として」も存在するという点をどう理解すべきか。著者がアンセルムスの「より大いな

る」という語をプラトンの「実在性」(reality)の意味で解していることは既に述べた。この「実在性」のおおむね領域は、あるものすべて、したがって、人間の思考、想像に依存するもの(fictions)も含んでいる。そして、すべてのものは、その「自存性」(aseity)に応じて存在論的段階を形成している。以上の観点からすると、「精神の内」から「実在」への飛躍はない。それはあくまで「実在性」の段階的相違なのである。したがって最高の「実在性」をもつ「それよりもより大いなるものが何も考えられ得ない何か」は、単に思考に依存するもの(fictions)ではなく、実在としても存在する。アンセルムスの「存在論的証明」はプラトンの思考の形式においては妥当すると著者は考えるのである。

以上、第1—3章を中心にその内容を紹介した。本書は、アンセルムスのPをプラトンの思考の中で捉えようとする点で、Hartshorneの研究と一線を画しており、その限りで何らかの意義を有しているかもしれない。しかし、本書を繰り返し読んで思うことは、著者が他の研究者に対する批判に多くの紙面を費すあまり、かえって著者自身の主張が分りにくくなっていることである。さらに、著者は自説の主張にあたって、しばしば不十分なテキストの読みをしているように見受けられる。一つのことだけ記しておこう。著者は、アンセルムスが‘maius’と‘melius’を使い分けており、そこに気付かない点に他の研究者の誤りがあるとす。もし、そうであるとするならば、著者が自説を裏づけるために度々引用するM c. I—IV(特にIII)では、‘bonus’と‘magnus’, ‘maius’と‘melius’が同じように用いられている点はどう説明されるのであろうか。また、P c. IIIの‘melius’を単にアンセルムスの不注意で片付けてしまうのもいささか強引な読みではないだろうか。

アンセルムスの「存在論的証明」は著者の言葉によれば‘the perennial fascination’を持つものである。著者もそれに引きつけられた一人であろう。今後、さらにすぐれた研究を世に問うてくれることを期待したい。

---